

巻頭写真 日本の古代の木彫像に使われた楠と樟

Phoebe and *Cinnamomum* used for ancient wooden statues in Japan

古代の木彫像とそれらに使われた樹種は、日本列島における木材資源の利用史を検討する際に重要な意味を持っており、木彫像へのヒノキの多用をもとに、日本文化におけるヒノキ（白木）の重要性が提唱されてきた。しかし、その議論のもととなっていた木彫像の用材選択は、この 20 年間ほどに行われた金子ほか（1998, 2003, 2010）の調査で大きく見直され、奈良時代の 8 世紀後半に制作された一木造の木彫像にはヒノキでなくカヤが選択されていたことが明らかにされた。一方、日本ではすでにそれ以前の飛鳥時代から木彫像が制作されており、それらの用材はクスノキ *Cinnamomum camphora* (L.) J. Presl とされているものの、調査が困難なこともあって、その後の検討はなされていない。

日本ではクスノキには「楠」と「樟」のいずれの漢字も当てられているが、中国では、楠は楠属 *Phoebe* の樹木を、樟は樟属 *Cinnamomum* の樹木をさし、明瞭に区別されている。飛鳥時代の木彫像にクスノキが選択されているのは、日本には楠属 *Phoebe* の樹木が生育していないため樟属 *Cinnamomum* のクスノキが用いられたとも考えられた（岩佐, 2019）。一方、中国では楠属 *Phoebe* の樹木は古くから重要な木材資源とされ、中国江蘇省揚州にある前漢の広陵王劉胥の「黄腸題湊」という木槨墓には楠木が使われている。中国には楠属 *Phoebe* の樹種はおもに長江以南に 35 種生育しており、このうちもっとも大きくなる種の 하나가湖北省と貴州省、四川省を中心として分布する楠木 *Phoebe zhenan* S.K. Lee & E.N. Wei である。この種の現地での生育状況と、木彫像あるいは木槨墓の用材としての可能性を確認するために、2019 年 8 月に四川省雅安市で調査を行った。今回訪れたのは四川省中央部にある雅安市の雲峰禪寺で、その門前から境内には樹高 30 m ほど、幹径 2 m ほどの大木が林立していた（写真 1, 2）。中国では自然保護区の外で大木を見ることは稀であるが、境内の解説板によると、この寺の境内と周辺には楠木の大木が 129 株生えており、県内には全部で 218 株あるとされていた。



写真 1 中国四川省雅安市の雲峰禪寺の門前に生育する樹高 30 m ほどの楠木 *Phoebe zhenan*.



写真 2 中国四川省雅安市の雲峰禪寺の境内に生育する幹径が 2 m ほどの楠木 *Phoebe zhenan*.

では、日本にクスノキの木彫像はあるとしても、楠木を使った木彫像はあるのか問題となろう。実はその可能性のある木彫像が見つっている。日本の木彫像の用材に関して先駆的な研究をされた小原二郎氏 (1916 ~ 2016) は約 750 軀の木彫像の用材を調べて 682 軀の木彫像の用材を報告されていたが、その研究に使用されたプレパラート標本 88 枚が残されており、2018 年に東京国立博物館に寄贈された (金子, 2019; 写真 3-5)。そのプレパラート標本を昨年再同定したところ、これまで魏志桜桃 *Padus wilsonii* C.K. Schneider と報告されていた東寺の兜跋毘沙門天立像と清凉寺の釈迦如来立像がクスノキではないクスノキ科の樹種で制作されていることが明らかとなった (能城・安部, 2019; 写真 6-8)。東寺の兜跋毘沙門天立像は中国唐代の 8 ~ 9 世紀の作とされ、清凉寺の釈迦如来立像は中国で製作されて 987 年に日本に請来したものであり (金子, 2019; 岩佐, 2019), *Phoebe* と特定できないものの、中国では木彫像に楠木が選択されていた可能性を示す結果となった。なぜ小原がクスノキ科の木材を魏志桜桃に当ててしまったかについては、当時の木材解剖学の情報でも十分にサクラ属 (広義) とクスノキ科は区別できるので、クスノキ科の木材がみつ油細胞を道管と間違えてしまった可能性が指摘された (藤井, 2019)。

なお、この現地調査と研究は JSPS 科研費 (No. JP18H00631) により補助を受けた。

引用文献

- 藤井智之. 2019. 魏氏桜桃とクスノキ科木材—清凉寺釈迦如来立像および東寺兜跋毘沙門天立像の用材樹種—. MUSEUM No. 679: 39-49.
- 岩佐光晴. 2019. クスノキ製木彫像をめぐって. MUSEUM No. 679: 51-60.
- 金子啓明. 2019. 「小原二郎氏旧蔵木彫像用材調査標本」について. MUSEUM No. 679: 5-10.
- 金子啓明・岩佐光晴・能城修一・藤井智之. 1998. 日本古代における木彫像の樹種と用材観一七・八世紀を中心に—. MUSEUM No. 555: 3-53, ii.
- 金子啓明・岩佐光晴・能城修一・藤井智之. 2003. 日本古代における木彫像の樹種と用材観 II—八・九世紀を中心に—. MUSEUM No. 583: 5-44.
- 金子啓明・岩佐光晴・能城修一・藤井智之. 2010. 日本古代における木彫像の樹種と用材観 III—八・九世紀を中心に (補遺) —. MUSEUM No. 625: 61-78.
- 能城修一・安部 久. 2019. 「小原二郎氏旧蔵木彫像用材調査標本」の樹種. MUSEUM No. 679: 11-37.
- 能城修一・岩佐光晴・藤井智之 (Shuichi Noshiro, Mitsuharu Iwasa, Tomoyuki Fujii)

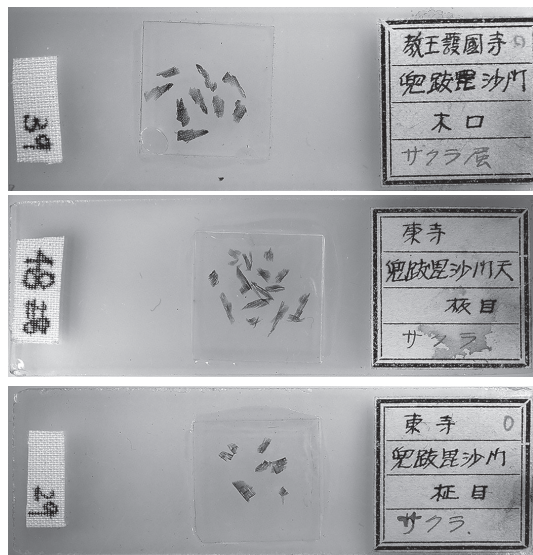


写真 3-5 「小原二郎氏旧蔵木彫像用材調査標本」中の東寺兜跋毘沙門天立像のプレパラート標本. 能城・安部 (2019) より転載.



写真 6-8 「小原二郎氏旧蔵木彫像用材調査標本」中の東寺兜跋毘沙門天立像のプレパラート標本の顕微鏡写真.